



遠いアフリカのボツワナから

在ボツワナ日本大使館 二等書記官 さくらい 櫻井 しんいち 真一

1. はじめに

「ボツワナ」と聞いて、世界のどこに位置するのか容易に想像できる人はそう多くはないと思います。アフリカ大陸南部と言えば2010年にサッカーワールドカップが開催された南アフリカ共和国（以下「南ア」と略）が有名ですが、ボツワナはその南アの北側に位置し、ナミビア、ザンビア、ジンバブエと国境を接する内陸国です。日本からは最低3回は飛行機を乗り継ぐ必要があり、航空会社によりますが、香港、シンガポール、又はドバイで乗り換えた後、いったんは南アのヨハネスブルグに到着します。ヨハネスブルグからボツワナの首都ハボロネまでは、ボツワナ航空と南アフリカ航空が50人から70人乗りのプロペラ機で、毎日それぞれ3-4便の往復をしています。乗り継ぎの時間を含めれば日本から最短でも24時間、乗り継ぎが悪いと36時間程度かかる時もあります。



ボツワナ地図



首都ハボロネの街並み

ボツワナの首都ハボロネを訪れると、ここがアフリカなのかと驚かれる方が少なくはありません。1人当たりの国民総所得（GNI）が7,430米ドル（2012年世銀）と、隣国ジンバブエ（2012年650米ドル）、モザンビーク（2012年510米ドル）、ザンビア（2012年1,350米ドル）のそれと比べると比較的裕福な国と言えることができ、最近オープンしたショッピングモールを歩けばそれを実感することができます。ボツワナは地理的にも近い南アと経済的関わりが強く、70%の輸入品は南アからのもので、市内には南ア資本のスーパーが多く多種多様な食料品が並んでいます。

国土の大部分をカラハリ砂漠に覆われ、農業に適した土地が少ないことを背景にこの発展がどのように築けたのか、これはボツワナGDPの約30%、国家収入の約半分に寄与しているダイヤモンド産業と観光産業がその理由です。

2. ボツワナ概要

南部アフリカに位置するボツワナは、人口約200万人（2012年世銀）、面積は約58万平方kmで日本の約1.5倍の国土を有しフランスとほぼ同じくらいの広さです。しかし、国土の約8割がカラハリ砂漠に覆われているため、人々が住むのに適した土地は限られています。1966年に英国保護領からの独立を果たし、以降、一度も内戦はなく、多党制民主主義に基づき安定した政治運営が行われてきました。これはある意味アフリカでは珍しく、グッドガバナンスの模範例とされています。

3. ボツワナの産業

ボツワナ国内で主要産業を問えば、誰もがダイヤモンドと答えます。宝飾用のダイヤモンドが採掘されるボツワナは、年間の売上が約29億米ドルに達し、これは世界1位の数字です。「ダイヤモンドは永遠の輝き（A Diamond is Forever）」のキャッチフレーズで日本でも有名になったデビアス社が取り引きする多くのダイヤモンド原石は、同社とボツワナ政府が半々に出資し設立されたデブスワナ社がボツワナ国内にあるジュワネン鉱山やオラパ鉱山にて採掘したものです。日本は米国に次ぎ世界で2番目のダイヤモンドマーケットと言われ



◀ダイヤモンドの原石

ダイヤモンドの選別作業

ています。婚約指輪にダイヤモンドリングを購入した方の中にも、ここボツワナで採掘されたダイヤを持っている方が多いのではないのでしょうか。

デビアス社が取り引きするダイヤモンド原石は、多くはまずロンドンのダイヤモンドトレーディングカンパニー（DTC）に集められ、選別過程を経て、限られた権利者（サイトホルダーと呼ばれる）がオークション（サイトと呼ばれる）で購入し市場に供給されてきました。しかし、昨年（2013年）この歴史に大きな転機が訪れ、ボツワナ政府とデビアス社の長い交渉の末、デビアス社はこのDTC機能をロンドンからハボロネに移転することに合意し、2013年12月を期限として移転作業が進められてきました。今後は、カナダやナミビア等の鉱山から採掘されるダイヤモンド原石を含め同社の扱う全てのダイヤモンド原石は、いったんはボツワナに集約されることになり、ここでのオークションを経て世界中の市場に出回ることになります。これによるボツワナ国内での更なる人、モノ、金の往来が期待され、新たな経済発展の原動力になることが期待されています。

ボツワナでは観光産業がGDPの約13%に寄与する第2の産業に位置付けられています。国土の約5分の1は野生動物が生息する動物保護区に指定されており、ボツワナ北部に位置するオカバンゴデルタやチョベ国立公園が有名です。一度家族を連れてチョベ国立公園を訪れた時は、多くの象が川で水を飲んでいる光景を見ることができました。同公園の約1万平方kmの広さに約12万頭の象が生息しています。その象の多さにより、公園を横切る幹線道路では日本では見慣れない象横断に注意を促す道路標識が立っており、また幸いなことに実際に私たちも道路を横切る象の群れを目撃することができました。ここチョベ国立公園を訪れるベストシーズンは5-9



象注意の標識▶

道路を横切ろうとする象

月と言われている「乾期」です。水を飲むためチョベ川に集まるキリン、象、カバ、バッファロー等大型動物の大群を見ることができます。

4. ボツワナの人々

簡単に言えば朗らかで、仕事もプライベートもマイペースといった様子です。ボツワナは1966年の独立以来一度も内戦やクーデターを経験していないことが示すように、人々は好戦的ではなく穏やかな振る舞いを基本として、数ある部族間でもお互いを尊重し、時間的制約を気にしない姿勢を崩さず今日に至っています。しかし、仕事に関してもその姿勢を崩さないボツワナ人と一緒に仕事をする日本人にとっては、やきもき、又はいらいらさせられる毎日です。10時のイベントに出席するため9時50分に会場に到着してもまだ数人しかおらず式典の準備が淡々と進んでおりあぜんとする時もあります。11時の会議に出席するため10時55分に到着してもまだ出席者の半分しかそろっていないため全員がそろってまで15分程



ボツワナの民芸品



度雑談を交わして待っていたり、会議が終われば必ずと言ってよいほどコーヒー又はお茶がサーブされ、1時間の会議が結局2時間かかったりと、予定どおりに進まないことが多いです。

日本、特に東京の仕事に対する感覚とボツワナのそれとは大きな違いがあり、着任当初は戸惑いの毎日ではありましたが、例えば他人を待つ間の雑談、ティーブレイクの中だからこそ得られる情報も多く、またコーヒーを一緒に過ごす時間が増えれば増えるほど関係者との親睦も深まります。仕事に対する習慣、時間的感覚が大きく異なりますが、ある程度緩やかに、自分を失わないボツワナ人の仕事・生活に対する価値観は、時に見習うべき部分もあるのではとも感じております。

5. 携帯電話事情

アフリカの携帯電話と言えば、携帯電話を持つマサイ族が数年前に話題になりましたが、今ではスマートフォンも駆使すると聞いています。

ここボツワナでも固定電話以上に携帯電話の普及が進み、普及率は2002年には20%程度だったものが、2012年には約150%にまで爆発的に向上しました。国内では南アMTN系のマスコム、フランステレコム系のオレンジボツワナ、ボツワナ電気通信会社 (Botswana Telecommunications Corporation) 系のBeMobileの3キャリアがサービスを展開しています。都市圏では3Gサービスが提供されLTEの実証実験も既に行われています。携帯電話事情について、ボツワナはアフリカの中では先駆的であると言えます。

6. 放送のデジタル化

2013年2月にボツワナ政府は同国の地上デジタル放送にISDB-T方式 (日伯方式) を採択することを正式発表しました。これは、それまでの総務省及び関連の民間企業、団体等による多くの働きかけが実を結んだ結果であり当該方式の優位性が評価された結果でもあります。ボツワナは当初、DVB-T2方式 (欧州方式) を支持する技術陣を中心とした評価チームで検討が進んでいました。しかし、その頃から日本側の継続的な政府上層部への働きかけの効きがあり、ボツワナは地上デジタル放送がもたらす社会経済性にも着目する必要があるとの立場に立ち、2012年に日伯方式と欧州方式の比較試験がブラジルの協力を得ながら行われました。手続に透明性、中立性を重視するボツワナ側からは日本側に対し、この時期の日本からの働きかけは控えてくれと連絡がなされたほ

どでした。検討の結果、固定端末向けには同等のパフォーマンス、移動端末向けには日伯方式が優位との結論に至り、ワンセグ機能が高く評価される形で日伯方式決定がなされました。これは前述のとおり、当地での高い携帯電話普及率を背景に、特に貧困層が多く居住する地方において情報格差 (デジタルディバイド) の一つの解決手段としてテレビの普及率向上を重視している点が考慮されたものと思われます。

国際電気通信連合 (ITU) は地上デジタル放送への完全移行を2015年6月までに、ボツワナが加盟する南部アフリカ開発共同体 (SADC) は2013年12月末までと定めています。既に、SADCの設定する期限が過ぎていて多くの国はアナログ停波をまだ迎えていませんが、今正にアフリカ諸国はITUの期限に間に合わせるべく、地上放送のデジタル化に向けた取組を加速させているところです。

ボツワナ政府も2015年をデジタル放送元年と位置付け、デジタル移行をスムーズに行うための各種政策立案に奮闘しています。2013年7月にボツワナ政府は地上デジタル放送の開始式典を行い、日本からの支援を得る形で、首都ハボロネと国内第2の都市フランシスタウンにおいて地上デジタル放送の送信が開始されました。同じく日本の支援により、ハボロネではデータ放送が受信できる環境が整い、データ放送のコンテンツ作成に向けた人材育成コースが実施され、技術移転が進んでいます。来年度からは政府開発援助 (ODA) を活用した技術協力プロジェクトも開始される予定であり、日本の支援がますます本格化することが期待されます。



シビレ送信所の鉄塔